



かなであん

〒249-0002 逗子市山の根1-7-24
Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

2019

新しい年が明けました

無力の凡夫仏教者の覚悟

「平成最後」という枕詞で語られる新年を、皆さまにはどのようにお迎えでしょうか。

他の月日の移ろいのように淡々と年を重ねるのもよし、過ぎ去った月日を省みたり何か区切りをつけたりするのもよし、日本人は新しい年を迎えるということに、何かを思い、何かしなければと意識させられます。しかし、この時期には、商業ベースにのった真の宗教からは離れた「宗教風」な風習ばかりがまことしやかになっています。

私たち念仏者（仏教者）は、迷わず間違わず仏道を歩めているでしょうか。

* * *

がん闘病の経験をもつ私ですが、今回の長引く入院加療に時折くじけそうになりながら、三ヶ月に及ぼんとする入院生活の中で新年を迎えました。

思うようにならない、先の見えない日々、支えとなるのは、もちろん医師や看護師さん、そして家族ですが、一つ一つ「そうだったなあ」と頷ける親鸞聖人のお言葉を反芻しながら踏ん張ることができています。

今も日本人の永遠のベストセラー「歎異抄」には、我々の心をとらえて離さない数々の

お言葉があります。嫌な顔をせず職務を果たす看護師さん、容赦ない厳しい治療をことも無げに施す医者に身を任せながら、ベッドに力なく臥していて味わうのが、慈悲について語られたこのお言葉です。

* * *

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとく助けとぐること、きはめてありがたい。また浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大悲大慈の心をもて、おもふがごとく衆生を利益（りやく）するをいふべきなり。今生に、いかにいとおし、不便（ふびん）とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲にてさふらふべきと、云々

（第4条）

慈悲には聖道門と浄土門があり、聖道門で慈悲というのは、対象を憐れみ、悲しみ、保護してあげようというものです。しかし、思いのままに人を助けてあげることはできません。まさしく今、私に関わってくれているすべてがそうでしょう。

そこで浄土門では、慈悲は、

お念仏をして早く仏になって、その仏の大慈悲をもって、衆生をたすける道しか、我々凡夫にはないと気づかれたのです。

今この世にあって、どれだけ同情し、気の毒に思っても、完全な意味で他者をたすけてあげることはできないのです。

私はその中に身を置きながら、自分も含めてその力を過信せず、落胆せず、おまかせして生きるしかない。だとすれば、ただただお念仏することだけが、すべての人を救う道だと、親鸞聖人ご自身が我が身の凡夫の非力を強く自覚した覚悟のお言葉だったと頷かされる日々です。

親鸞聖人は世間で善い行いとされること、自分の生業に努めることを否定されたわけではないのです。「不完全なもの」と認識しなさいと言っておられたのだと思います。

何ものにも代えがたい愛おしいものであるとしても、自分の愛（力）には限界があります。病気で言えば、それは医者、看護師、家族、そして患者本人も同じです。つねにそのことを忘れず、凡夫の覚悟をもって、病人は病人の、家族は家族の、医者は医者、その他の人もそれぞれの今に応じながら、おまかせして生かされていく、その道しかないと思わず歩める道、それが念仏者の生き方だったと味わっています 合掌

2019年度 奏庵初法座

日時

1月26日(土)

午前11時より

「真宗宗歌」

正信偈

法話

ご文章拝読

「恩徳讃」

～*～

おとき

澄みわたった美しい日本晴
れで新しい年が開けました。

皆さまには、嬉しい中に、
悲しい中に、不安な中に、そ
れぞれに迎えられたことと思
います。私は病床で迎えた新
年でしたが、生かされる「い
のち」を、また皆さまととも
に一步一步進ませていただ
けることを楽しみに踏ん張っ
ています。庵への階段がご苦
勞をおかけしますが、呉々も
ご無理のないよう、ゆっくり
とお参り下さい。本年も楽し
みにお待ちしています。



御礼とご報告

皆さまにはご心配をおかけし、
お見舞いやお気遣いをいただ
いておりますこと、ありがたく、
心より御礼申し上げます。

昨年の10月末の緊急入院よ
りの入院加療は年を越して続
いておりますが、一進一退を繰
返しながらの治療の段階を乗
り切りつつあり、今は長期入
院で落ちた体力を戻すための
日々を、春の声を聞く頃には
庵に戻れるようにと養生して
おります。

お一人お一人にお礼を申せ
ずおりますこと申し訳なく、
ご無礼をお詫び申し上げます。

ありがとうございました。

~~~~~

### 信心の華

「凡下の合掌」

いのちあふれる

人の世は

朝がきて

日が暮れ

また夜が明ける

いまは

この大いなるながれに

ただ 手を合わすのみ

「百年」

百年たてば

自分の子も孫も

いなくなり

泥まみれの

私の生涯を知る人も

なくなるだろう

しかし そこに

草が繁り

虫が生きていたら

私はうれしいな

(現代の妙好人・榎本栄一)

「こんなところに日本人」  
という番組で、アフリカの小さな国の学校でコンピューターを教えている日本人青年を紹介していた。彼は超一流通信企業の技術者だったが、コンピューターの中だけで何千億というお金が取引されるのに疑問を抱き、すっぱりと会社を辞め、JICAを通じて今の仕事に就いたという。■ネット社会に疑問を感じた人間が、電気の供給も十分でない国でコンピューターを教えている。一見つじつまが合わないようだが、これが、これからの時代のバランス、ITなしでは成り立たない世界とのバランスは人間性を見失わなければ保てる道が見え少し安心させられた。■今勝ち組といわれる人のほとんどは、IT産業を起業した人たちだ。そこで扱われるものは膨大だが、そのすべては人の手を経たものであり、ネットを動かしているのは膨大な数のユーザーのパソコンだが、それで得られるのは情報のみで実体はないものだというのを忘れてはならない。■ヨーロッパの産業革命は、地球規模の天候異変による飢餓がきっかけだった。飢餓から人間の命を救ったのは生産の向上で、人間の生命は生産によって繋がれてきた。生産には実感があり、自ずと地に足のついた生き方になる。そしてその基礎となる知性や芸術も磨かれ人間性が育まれていく。■これからの時代は、コンピューター社会と体を使った生産社会、それらが上下の格差なくバランスが保たれて実現されていくことではないだろうか。人間が無力であることは変わることがなく、それを克服させてきたのは、やはり心身のバランス、中道という智慧だった。(病室にて)